



夷白

3233



114
A 2999

賤吏某謹而白

大正十一年四月
大隈侯爵邸寄贈



伏而惟レハ今ヤ工部ハ省ノ一ニシテ
其所司百工ヲ興造シテ工ノ涖源ヲ
開キ以テ國家ノ富饒人民ノ便益ヲ
達セントノ所趣者固ヨリ論ヲ待タス
然リ而シテ其事業ヲ所司スルニ至テハ
又上下官私ノ分界區別ナクシハ有
可カラズ公界區別何ヲカ是ヲ云伍

といふ大小鏡ヲ鑄造シ渡山津乃電信
等ヲ興造シ其便益ヲ計リ其便利ヲ
求メ出入以テ損益ヲ計ルノ如キ是人
民私商ノ事業業ナリ何ヲカ右ノ所司ト
云是カ獨ヲ開キ人氏ヲシテ其便利便
益ナル所以ヲ告ラシメ又此ノ規則ヲ定
ム他ノ妨害ヲ防キ其商業ノ自由ヲ
達セシム是古ノ所司スル者ナリ然レモ

不致不問ノ民自ラ求テ其事業業當
括スルア然ス故ニ今ヤ上ニ審テ至キ所ヲ
至キ大ニ鉄道汽車其他鑛山電信
等ノ類ヨリ小ニ船隻汽船等ニ至マテ
右ヲシテ所司セシム是レ已テ得ル出ル
愚考存存在ヲ得テ高船ヲ修養スルノ
類ノ如キ是也右ノ苟モ所司スルルニア
ラス何ヲカ所司スル者ニアラスト云物也

買束シる船ヲ欲度シ其損益ヲ計ルノ
如キ事業見ル業ナリ又レ言業ハ言
客ノ事業ニ依リ臨檢ノ所至ヲ以テ利ヲ
漸ルモノナリ右ヲシテ是ヲ為ス時ハ其所
司スル人ハ皆官負ニシテ其規ハ皆官
別ナリ官負ヲ以テ別ヲ為ル其言業
立ツ可ラス仮トハ当港製作所ノ如キ
従来凡百ノ志械備具シ傍ラ小管ノ

ドツク場ヲ持シんソ船ヲ欲度スル所
以ノモノ一モ備ハラサルナシト虽モ欲度船ノ
輻湊ヲ見ス將タ工職人ノ加増ヲ見ス
依然トシテ其業況盛大ニ進ヲ不見
然リ而シテ外國人ボイド日業ヲ大浦ニ
興ス又製作所旧器械方ノモノドモ西客
留力日公日業ヲ水ノ浦ニ興ス此ノ兩人ハ
器械製作所ニ及唯多クハ人カラ以テ

其業ヲ為スト雖モ事業製作所ニ
過ルカメリ然レモ是地ナシ一自由ノ業ヲ
以テ是ニ意シ一公別ノ友途ヲ以テ是
当ル是公私ノ難易ヨリ事業盛衰ニ
関スル所ナリ先ニ惟ニルニ旧幕府中
所ニ新ノ初メ深リ其弊ヲ察セラレ其
体七郎白即委任ニおせんヲ友別ヲ
廢シ日人ノ所至ニ即任セおせん其處

漸次盛大ニ進ムノ事是又即盤龍ヲ
蒙リ志業ヲ遂ズ莫ク遺憾ノ者其後
山尾工部権大丞殿即出張ノ上當港
ノ二般弊ヲ察セラレ漸ク製作ノ業ニ奮
發セハ自然ト土地無業ヲ回復ス云々
即説諭モ有之然レ今日ニ至ル日所ノ
盛衰ニ當港ノ盛衰ニ関ス伏テ願クハ
日所ヲ察ス高島民ノ内古お当ノ利益

税金ヲ以テ而貨百取半カ又ハ所拂下
お半取左取半取別ヲ磨レる人一角
自由ニ任セ取半取事業商シク其宜
得る業ノ盛ナル心然ナルヘシ其盛ナルニ
及テハ先期取金ニ其系余モ所費ニ
お半取立神ト申シ取場所無類ノ
ドツク場ニテ取取漸次此場ヲ復造シ
一層盛大ニ立ラシメ終ニ清國上海ノ

終取港船モ此地ニ輻湊セシメハ陸ヲ當港
惣業ニ復スルアラコカ当長崎ノ如キ
此港ノ一ニ居ト虽モ曾テ惟ニルニ古ヨリ
此ニ二百余年

皇國只一箇港ノ貿易地ニシテ唐蘭
ノ来船ヨリ貿易ノ道盛ニ行レ内外
人民ノ輻湊スル亦多シ又其物品ノ
運輸タル尺寸ノ布ト虽此地ニ賣買セ

スレハ他ニ賣買スルヲ許サズ故ニ其土地
無業其民ハ身神ヲ方セス恰モ尸
位ニシテ飽食暖衣活計ノ難キ何モノ
タルヲ知サルカ如ク以テ年月ヲ送り今日
至ル恐ルニ天運巡環天其一方ニ幸スルヲ
許サズ近來横濱ヲ始メ諸港社々開
港ニ存シ内外ノ貿易何リ長寄而巳テ
必トセサルニ至ル於此ヤ前ノ所謂尸位ニテ

産食スルノ民男ハ生産ノ道ヲ急ラス
女ハ織ヲ知ラス其被弊日々月々
勝ケ言可ラス恐リト虽今テ是ヲシテ
男女耕織ヲせぬト虽因ヨリ一ハ港ノ
土地人多ク地狭ク況ヤ積年蓄積ノ
人氣貫事ニ逼セス子ヲ求テ飢ヘテ
待カ如ク然リ希クハ同所ヲ無業ニ續
セスハ当港ノ活計立可カラス当港ノ

私産保ッ可ラス且是ヲ以テ意願ニ堪
ズ敬テ

厚融ヲ話ヌト云示

明治六年癸卯三月

長崎縣

松村辰昌

再拜書



奉 奏 參 議 大 隈 重 信 殿 下

